



2009年 生物工学功労賞 受賞

受賞にあたって

月桂冠株式会社 専務取締役 安部 康久



この度は、思いもかけず、「生物工学功労賞」を頂き大変光栄に存じます。

しかし、このような賞をお受けするに値する貢献ができたかどうかいささか心配しております。飯島会長をはじめ選考委員の皆様にご心から御礼申し上げます。この賞を頂きましたのは私の仕事というより、月桂冠㈱がこれまで本会ならびに清酒業界の発展にいささかなりとも貢献してきたことを評価していただき、会社を代表して今回の功労賞をいただいたものと存じます。そういった意味で、終始ご指導いただいた大学の先生方や当社の諸先輩はじめ一緒に研究に携わってくれた諸君にも深く感謝申し上げます。

私は、2003年から本会の理事に選任され、新名会長、五十嵐会長の二代に渡って4年間理事を務めてまいりました。引き続き、本年（2009年）の総会までの2年間は評議員をいたしました。この間、清酒業界の代弁者としていささかなりともお役に立つように努めてきたつもりでございます。また、理事を拜命する前には、もっぱら裏方をやらせて頂いておりまして、本会大会の大切な行事の一つでもあります懇親会が大阪や京都にて行われました際には、伏見のお酒を皆様に試飲していただくお手伝いをさせていただきました。また、谷会長の時の大阪での年次大会では、弊社の今安研究所長が実行委員長となり展示会場を盛り上げるため清酒のブースを設けて、伏見を始めとして全国の各社から協力いただいた大吟醸酒などの試飲が計画されました。ちょうど私が日本酒造組合中央会の清酒技術委員を仰せつかったこともあり、中央会から補助金をいただく交渉をするなど、日々東奔西走したことも懐かしい思い出でございます。

少し研究面を振り返ってみますと、私が会社に入社した頃は、防腐剤のサリチル酸の問題で清酒業界が一丸となって取り組んでおりました。日夜、火落ち菌の研究に没頭したことを昨日のこのように思い出します。そして、本会大会で当社から発表をいたしました。このような研究に携わったことが良い経験となり、カナダ政府からのカルバミン酸エチルの問題が提起されたときも、研究所の副所長として、清酒からカルバマイドを酸性ウレアーゼで除去する方法を武田薬品㈱様と共同で開発し、業界はもちろんのこと酒類の中でもいち早くこの問題を解決することができたことは清酒業界に大きな安心をもたらしたと思っております。しかし、残念ながら当時の情勢から発表の機会は得られませんでした。このことは、今思い出しても苦しい思い出として残っております。

また、当社では六流派の杜氏が集い、技を競い合った時期がありました。この時にちょうど酒造りを担当することになり各流派の酒造りを体験する中から、吟醸酒造

りで何がポイントなのかをつかみ、以前に四季醸造を行うにあたり先輩達が開発したさまざまな機械に改良を加えたり、まったく新しい装置を開発して、最新の設備の吟醸ラインを完成させました。この設備を使い、これまでに全国新酒鑑評会で10回以上金賞を受賞しています。本設備の詳細については熊本で行われました本会のシンポジウムで発表しました。

この他、本会の第1回技術賞を受賞した融米造りのファジエキスパートシステムの構築についても、故大石 薫君をはじめさまざまな同僚と一緒に研究し共同受賞できたことを嬉しく思っております。そして、この融米造りも現在も改良の研究が続けられております。この造りは従来の酒造りと比べて非常に省エネタイプの造りになっておりますし、また原料利用率も高いという特徴を持っています。まさしく、これからの時代に適した醸造方法だと考えています。しかし、このような技術革新もその時代時代によって大きく評価されたりそうでなかったりします。京都大学農学部の先輩にあたる船井総研の船井様が次のように言うておられます、「人間の歴史を見ているとあたかもスパイラルの階段のようだ。上から見ると行きつ戻りつしていてちっとも進歩発展していないように見えるが、横から見ると着実に良い方向に進歩向上していることが分かる。」と述べておられます。清酒の歴史を長い目で見た場合まったく同じようなことがいえるのではないのでしょうか。将来この融米造りをもっと脚光を浴びる時が必ず来ると信じて現在も研究を進めているところであります。

また、最近の研究を見ても真に目覚ましいものがあります。遺伝子組換えなどの新しい技術が次々と開発されてきており、酵母の表層にさまざまな機能をそれこそ千手観音のごとく提示する技術が開発されたりしております。人智もここまで来たのかということで、大変なことができるようになったものだとの思いで一杯になっていました。しかし、実際の醸造現場に行き発酵タンクの中をのぞいてみますと、大きな力でもろみが回転しながら発酵をしております。目に見えないほどの酵母菌にこのような力が出せるということに改めて感動したと同時に、人間はまだこのような顕微鏡下でしか見えない酵母菌のような微細な生命体の一つも創れないんだとはたと気づきました。人智をはるかに超えた大きな力があるのだとの思いで胸が一杯になりました。今後は何よりも謙虚な気持ちで研究に、酒造りに関わっていきたいと思っております。

この度は、このような過分な賞を頂き誠にありがとうございます。重ねて御礼申し上げます。